

保母および保育学生の社会的価値意識に関する研究 第一報 — 保母養成にかかる諸問題を中心として —

国立精神衛生研究所 櫻井芳郎

I. 研究の趣旨

現代は価値体系の変動期といわれ、価値観の多様化が青年層の生活態度や価値意識に大きな影響を及ぼしている。したがって人間的成長をめざす青年期教育をとことかうには現代青年の生活態度や価値意識の実態を把握し、人間的成長によよばず社会的心理的要因を明らかにすることが重要である。

とくに保母は子どもの人間形成に與する職業であるところから、保母および保育学生の社会的価値意識の形成過程を明らかにすることを望ましい保母像や保母養成のあり方を検討するうえの重要な手がかりになると考えた。

かような観点から保母および保育学生の社会的価値意識について昭和44年度から10年計画で調査をおこなってきた。調査の視点は1. 基本的生活態度および具体的な生活態度志向、2. 言語刺激による情緒反応、3. 対人相互認知、4. 人間関係における心理的・社会的距離感においていた。調査対象は昭和44年度から51年度までの8年間に保母536名（経験、中堅、老年および新任保母）、公立保育学生2692名、私立保育学生1643名および福祉系大学女子学生475名の合計5346名である。

II. 社会的価値意識の実態

1. 基本的生活態度および具体的な生活態度に関する価値志向

保母では世代の相違や社会情勢の反映とみられる多様な変化が認められ、さうに詳しく分析すると経験年数とともに異なる職業意識の変化やライフサイクルにともなる態度・意識の影響がうかがわれる。保育学生は所属集団ごとの凝集化が認められ、一方で具体的な生活態度については理念的目標志向と現実的水準での情緒的反応との間で揺れ動いていることがうかがわれる、このような状況を導きだしている重要な背景として社会的価値体系と青年期教育の現状が問題になろう。

2. 言語刺激による情緒反応

言語刺激による情緒反応の状況とその推移をながめてみると変化したものとして「仕事」「奉仕」をあげることができよう。「仕事」では情熱の低下、「奉仕」では所属集団によって反発から肯定へ、肯定から反発へ微妙に揺れ動いている。固定化している反応としては「自由」「家庭」（あこがれをもつ）、「義務」「規則」（抵抗を感じる）、「天皇」（自分には関係ない）、「愛国心」（多様な反応）がみられ、時間変化していない。このような反応が従来期待されてきたものとはかなり異なっているといえよう。

へ、肯定から反発へ微妙に揺れ動いている。固定化している反応としては「自由」「家庭」（あこがれをもつ）、「義務」「規則」（抵抗を感じる）、「天皇」（自分には関係ない）、「愛国心」（多様な反応）がみられ、時間変化していない。このような反応が従来期待されてきたものとはかなり異なっているといえよう。

3. 対人相互認知

自己認知、他者認知および他者の自己認知（自分は上司や教師かどうかみられているか）の状況をみると保母、保育学生とも自己認知と他者認知、自己認知と他者の自己認知とが一致している者は多くない。また最近の保育学生の教師に対する認知に問題を感じられる。保母および保育学生と上司や教師との間の相互理解の欠如が顕著に認められる。

4. 人間関係における心理的・社会的距離感

仕事上の問題、職場の人間関係、金銭との問題、家庭内のこと、人生観や生き方、自分の将来や進路、恋愛や結婚などの問題について誰にどの程度相談するかを調べてみると友人をあげる者が多だが、それも多少意見を開く程度にすぎない。親は金銭上の問題、教師は就職の場合以外にはほとんど期待されていない。

III. 考察

保母および保育学生の社会的価値意識の実態を検討してみると次のようないくつかの問題の存在に気づくことができよう。まずオ1に変動期にある価値体系の影響がきわめて強く、青年層に現代に生きる人間としての人間形成の目標の曖昧さからくるほどいとあがきを感じられる。オ2に保母養成のあり方が問われていることがうかがわれる。昭和47年度に全面実施された保母養成教育課程の改正が1日教を破り、人間尊重の精神が強調される現代にふさわしいものであったかどうかの検討を必要とする時期にきてはいるといえよう。人間として期待される諸徳性や実践的規範についての反応が従来望ましいとされていたものとかなり異なってはいることをふまえて保母や保育学生の共感がえられたセリ方で取り組む姿勢が保育園従事者に望まれる。